

山中恵美子さん●京・町家文化館副館主

英語漬けの生活から
京町家の保存活動へ

町家の暮らしも着物を着るのも窮屈だった。英語を使った仕事と外国生活が好きだった——そんな女性が今、京都の真ん中で、町家の魅力を後世に伝える仕事に生き甲斐を見出しています。生家は下立売智恵光院にある、文政年間（1818～29年）創業の油専門店。180度ともいえる方向転換と町家への思いを、ご実家（景観重要建造物・登録有形文化財）の奥座敷で伺いました。



やまなか えみこ

京都市生まれ。同志社大学文学部英文学科卒業。1997年同志社女子大学文学研究科日本語日本文化専攻修士課程入学、2000年同課程修了。同年、博士課程（後期）入学、2003年同課程満期退学。現在は、父上が館主を務められる「京・町家文化館」の副館主。扶桑社のムック『春京都』『夏京都』『秋京都』『冬京都』に「山中恵美子の町家日記」を連載中。著書に『杏の木のひとり言 油商家に生まれて』他。

町家文化の発信基地を支える

——ご実家の建物の向い側に建つ「京・町家文化館」を拝見しました。とても懐かしい香りがしますね。現在はこちらを拠点に、どのような活動をしておられるのですか。

山中 京・町家文化館は2002年、実家が所有する借家が空いたのを機に開館しました。手始めに京都を知る講演会をしようということで、「町家で学ぶ京都の歴史と文化」という公開講座を月1回、今まで50回以上開いています。講師は大

学の先生や、京文化の担い手の方々です。老舗の和菓子屋のご主人、能楽師、截金師に陶芸家。元舞妓さんにも講師として来ていただきました。

24回目の講座が終わったときに、町家の存続のためには、今後は若い人も取り込んでいく必要があると考えました。そこでこの講演会を同志社女子大学との共催にさせていただきました。室内の掃除も学生さんに手伝っていただくこともあります。中には畳を拭くのは初めてだったり、座布団に向きがあるのを知らなかったりする人もいますね。「深く入

って、触って、感じていただく」ことの大切さを感じているところです。

——京・町家文化館と並んで「上京歴史探訪館」という看板も掛かっています。

山中 上京区の歴史・文化情報の発信地です。「山中油店」の周辺は、平安京の内裏、つまり天皇のお住まいがあったところ。上京区には御所をはじめたくさん史跡があるのですが、観光客はそれほど多くありません。そこで、もっと上京の歴史や文化を知っていただくのと、上京区役所と同志社大学が協力して2005年に設立しました。館長は、私も大変お

世話になった同志社女子大学の麓谷壽先生です。スタート時は春秋の3カ月ずつの週末3日間のみ開館していましたが、リピーターも増えて、今は3月から11月の週末3日間、開けています。運営には地域の方々が協力してくださるので、遠方からの観光客にとっても貴重な交流の場になっています。

大好きな英語の仕事を
していても
足りなかった「何か」

——そもそも、町家文化に関心を持たれたきっかけは何だったのですか。

山中 私は英語が大好きで、大学卒業後は通訳や World Game Institute というアメリカの環境NPOの活動の進行役をするなど、英語にどっぷり漬かった生活をしていました。しかし、通訳はあくまでも黒子に徹しないとけない仕事。自分で言いたいことがあっても口に出すわけにはいきません。私はアメリカやヨーロッパでも数年間暮らして、とても楽しい時間を過ごしましたが、大切なのは英語を話せることよりも、「自分で話せる内容を持つこと」だと気付いたんです。英語は、自分の考えを伝えるための手段

の一つだったんですね。外国で暮らしてみると、向こうの方々から聞きたいのは京都や日本のことなのです。でも、日本にいたときの私は実家での伝統的な暮らしに重圧を感じて、そこから出ることはかり考えていました。だから京都について、日本について、知らないことが多すぎました。それでは本当の国際人とは言えないのではないか。そこで、もっと自分の足元を見てみようと思ったのです。

——それで、帰国されてから大学院に入り、京都の研究を始めたのですか。

山中 それまでの私はどこか迷っていた。私は「私はこれが話せる」というものを持つていなくて、自分に自信が持てなかったのだと思います。だから、何か自分の核になるものを得たかった。10年前、同志社女子大の大学院で社会人の受け入れがスタートすることを知り、良いチャンスだと思って日本語日本文化専攻に入学しました。高校時代、歴史の授業が苦手だった私にとっては、大きなチャレンジでしたけれど（笑）。まだ英語に関係する仕事を続けたいと思っていたので、小学校で英語を教える仕事も同時に始めました。

——お仕事と学業を両立されたのですね。

山中 午前中は英語の教師で、午後は大学院の学生。夕飯の支度を気にしながら図書館で勉強するのは嫌だったので、朝5時前に起きて三食すべてを準備してから出勤していました。帰宅後、寝るのは2時とか3時。小学校から女子大へ移動する電車の中で睡眠を取っていました。でも大学院の授業には無欠席で通いましたし、怖い先生の授業に出て消耗しても、翌日仕事に行つて発散することでバランスを取っていたのだと思います（笑）。あんなに忙しい時期はなかったけれど、非常に充実していて、一番楽しい時期でもありました。それでもまだ、京都文化の研究より、英語に関する仕事や勉強の方が生活の半分以上を占めていました。

——比重が逆転したのはいつですか。

山中 「私の京都観」という題でレポートを書いたことが契機となりました。そのとき初めて実家の伝統的な暮らしについて書いたんですね。すると、レポートを読まれた麓谷壽先生が「君のすることは、これと違うか」とおっしゃったんです。私は、自分が生まれ育った町家の暮らしを当たり前のことと思っていたので

すが、臈谷先生は「あなたの『当たり前』は、他の人々にとって当たり前ではないんですよ」と。それから先生のご指導を受けながら、実家に受け継がれてきた暮らしや伝統に関心を向けていったのです。

大学院に入って2年目の頃、平安京について調べていると、私の実家の周辺が、そのまま平安時代の宮中の様子を表わす絵巻物「年中行事絵巻」に描かれているのと重なったんですね。それを模写することになりました。平面に線で描いた絵に色をつけていくと、絵が次第に立体的なものに見えてきます。そのうち平安時代の声までもがいきいきと聞こえてくる。古いものには全然興味がなかったのに、遺跡の発掘説明会などにいくと、そこにあった暮らしが見えてくる。いろんなことが自分の中でつながってきたんです。これは面白い、今まで遠ざけてきた「当たり前」の繰り返したった町家の暮らし」にも自ら主体的に関わることで、その意味を見てみようと考えようになりました。

——本をお書きになったのも、「京・町家文化館」を開館されたのも、その一環なのですね。

山中 どれも気が付けば、臈谷先生が導いてくださったことです。先生との出会いがなければ今の私はいないと思っています。でも大変厳しい先生でしたので、以前はもう怖くて怖くて。最近はどうやう先生がおられる前でも話せるようになり、「君もようしゃべるようになったなあ」と言っていたいています（笑）。

四季と共にある町家の暮らし

——いま改めて、町家の魅力をどう捉えておられますか。

山中 今、京都を紹介するムック本に「町家日記」を連載させていただいています。その中で私が町家を訪ねてインタビューする企画が始まったのですが、町家の仕事をするときは着物を着るようにしているんです。実は昔の私は、町家の暮らしと着物は遠ざけておきたかったもの。着物は両親がたくさん作ってくれたにもかかわらず、一生着ることはないだろうと思っていました。それが昨年の秋から着るようになったんです。ある婦人雑誌から「私と着物」というテーマで登場してもらえないかというお電話をいただいたのですが、私は写真を撮られるのが嫌いなので一度はお断りしようと思

ました。ところが母が「いつまでも声かけてもらわれへんえ」と言うので、「そいうやなあ」とお受けすることに（笑）。

撮影当日、母が一つのかんざしを出してきました。むかし祖母が私にくれたものだったのですが、当時は着物を着るつもりがなかったで「いらない」と言っただんです。それを母が取っついてくれた。そのかんざしを見たとき、いろんなご縁でこのような仕事をさせていただいていることや、小さい頃からの実家での暮らしなどが、わあっと甦ってきました。その日から、毎日夜中に着付けの練習を始めました。

——素敵なお話ですね。

山中 着物と町家は共通点があると思います。私はどちらにもこんなに縁があるとは思いませんでした、どちらも時代の流れの中で一度はかえりみられなかったけれど、近年再び注目を浴びています。昭和30年代、実家の周囲の町家がどんどん新しく建て替えられていくのを見て、羨ましく思っていました。着物も需要が落ち込み、西陣は大変な時期を経験しました。無くしてしまうのは簡単ですが、将来にわたって伝えていくべきものだと考えています。どちらもリサイクルしな

がら長く使える点も共通しています。

着物は「こんな窮屈だなあ」と思っていたのが、着慣れてみると、実はとても楽なんです。絹という自然の素材が非常に肌に心地いいんです。町家も同じ。季節を上手に取り込み、自然と共に暮らせる家です。町家に暮らしていると、季節の移り変わりに敏感になります。両者とも確かに不便な面はありますが、マイナス面に工夫をして楽しみに変えていくことができます。この状況を楽しんでいる自分が、今ここにいます。先祖をはじめ本当にさまざまな方のお蔭だと感謝しています。正直なところ、雑誌等でよく目にする「町家」という言葉には抵抗がありますけれど、私にとっては、生まれ育った「普通の家」ですから。

古いものに価値を見出すことの素晴らしさを子どもたちに伝えたい

——その町家が近年はレストランなどに改装されて、ちょっとしたブームになっていますね。

山中 土足のまま二階へ上がってテーブルで食事をするお店もあるようですが、あまりにも町家本来の機能とかけ離れた

姿には疑問を抱かざるをえません。町家が単なるお洒落な空間になってしまっている。次の世代にもはや伝えていけないような使われ方をしている。町家がめちやくちやになってしまっています。

——危機感をお持ちですか。

山中 当然ありますよ。10年前に京都市に2万8000軒あった町家のうち、この7年間で13パーセントが壊されました。町家の減少には歯止めがかかってきましたし、保存への意識も少しずつ高まりつつありますが、町家の保存には費用がかかるので、どうしても行政の力が必要です。私の実家の建物は昨年、景観重要建造物に指定されました。小さな町家にも手当てをしようという動きもあります。今後は行政の援助とともに市民の町家を守ろうとする認識が不可欠だと思います。

——京・町家文化館を拠点に、何か新しい活動はありますか。

山中 子どもたちが町家に触れて、さまざまなことを考えられるような企画を練っています。ワークシートをしながら、これは木と紙など自然の素材でできている家なんだ、リサイクルできるから地球の環境を汚さない家なんだ、というふう

に学んでもらえればいいなと思っています。欧米生活でも感じたことですし、先日イタリアの建築家とお話ししていても感じたことですが、向こうの方々は古いものに価値を見出す教育を受けています。古いものに手を入れて大切に使う。この町家に来る子どもたちにも、そういうことを知ってほしいですね。

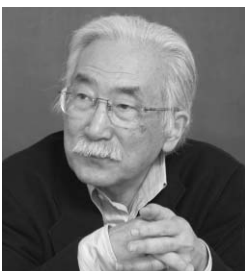
実家では、「神さんごと」と「仏さんごと」は、おそらく今も江戸時代と同じことをしています。先日もここで当家2代目の百回忌が行われました。お寺さんもおられたように、今の時代では珍しいのではないのでしょうか。それだけいろいろな人が見守ってくれているということ。京都の伝統が煩わしくて英語の世界に飛び込み、なおも自分探しをしに大学院へ行った私でしたが、ずいぶん遠回りをしたけれど今後も町家を中心とした京都の町文化の魅力を伝えていきたいと思っています。

——本日はありがとうございました。

（聞き手・當村まり、7月5日京都市上京区・山中油店）

山下勝弘さん●社会福祉法人牧人（まきびと）会理事長 福祉施設で 福音を宣べ伝える

教会の直接的な牧会を離れ、信徒と共に知的障害児の施設を創設して35年。以後、10カ所に上る社会福祉施設を造り、居場所を必要とする人々のための働きを続けている一人の牧師がいます。「牧師の働きの場は教会だけではない」という固い信念のもとに福音を宣べ伝え続ける一方、71歳で博士の学位を取得した奉仕と研鑽の人生を、東北の地を訪ねて伺いました。



やました かつひろ

1935年神戸市生まれ。60年同志社大学神学研究科組織神学専攻博士課程（前期課程）修了。同年日本基督教団東京山手教会担任教師、62年大森めぐみ教会担任教師。71年社会福祉法人牧人会（福島県西白河郡）理事長に就任、72年知的障害児施設白河めぐみ学園園長に就任、現在に至る。95年同志社大学神学研究科歴史神学専攻博士課程（後期課程）入学、2004年同課程退学。03年バングラデシュ国立ラジシャヒ大学Ph.D.、07年同志社大学神学博士の学位を授与される。

教会の奉仕活動で 運命的な出会いを経験

——最初に、教会から福祉施設へ働きの場を移された経緯をお聞かせください。
山下 私が大学院を修了した1960年は、いわゆる「60年安保」の年でした。私も「政治と教会」や、教会が果たすべき社会的責任について考えさせられた時代です。最初は東京山手教会で働き、2年後には大森めぐみ教会に移りました。この教会におられた岩村信二牧師の父上

は岩村清四郎先生という、大正初期に日本で初めて組織的な教会教育を行った先駆者。岩村信二牧師もまたキリスト教教育の専門家でした。私は学生時代、キリスト教教育をテーマに修士論文を書いたのも、もう少し教会の現場で研究を続けたいという希望を抱いていました。

大森めぐみ教会では学生青年会の活動が盛んでしたね。教会教育の広がりとしてさまざまな奉仕活動を行っていて、その一環として64年に始まったのがワーク・キャンプ、つまりボランティア活動

です。これは隣人の問題を自分の問題として捉えることによって社会的責任を持ち、青年たちの信仰を実践によって確かめようというもの。実存的な自己探求ですね。それで山谷の近くの教会の活動に参加するなどしていたのですが、どこか生ぬるい、お遊び的な感があつた。教会の中での活動だったから、社会に存在する「異質な他者」と出会わないのです。そういう疑問を抱いていたところへ、群馬県赤城村にあった知的障害児施設「敷島学園」がワーク・キャンプによる支援

を必要としていることを紹介されて、65年に初めて出かけた。もちろん事前学習をしてから行きました。しかし当時の民間の社会福祉施設は設備も貧弱で生活環境はあまり整っていませんでした。

——そこでどんな経験をされたのですか。

山下 「出会ったことのない他者」に出会った。驚きを通り越した強烈な経験をしました。子どもたちはとても人なつこい。ただ、私たちはどのように接すればいいのか分からなかったのです。しかし、私たちが微笑みかけると彼らは微笑み返してくれる。彼らもまた、神様が造られた人間なのだ。その神様を私たちは信じてきた、ならば私たちは共にここに在るべきだというのが私たちの結論でした。非常に単純な考えでしたが、これは、彼らと同じく神様が造られた人間であることを見出せなかった、私たちの問題だとその時思ったわけです。

そしてワーク・キャンプを4～5年続けるうちに思ったのが、「あの子どもたちを愛しているというのなら、共に生活してこそではないか」ということ。愛することは、生活を分かち合うこと、共に生きる場所を造ること。それが白河での

最初の建設計画へとつながっていききました。私たち自身の信仰的な問題が出発点だったのです。

手助けを求める人の隣人となり 10カ所の福祉施設を開設

——なぜ白河の地を選ばれたのですか。

山下 白河市郊外にあった日本キリスト教団川谷伝道所信徒の坂井周平さんが、建設用地2000坪の土地を無償で提供しました。そうと申し出てくださったのです。その連絡があつたのが68年12月、待降節の土曜の朝。翌年4月には、家族と大森めぐみ教会の青年4人と共に白河に移ってきました。彼らは今でも牧人会の施設で園長として働いてくれています。もう40年近い同志です。

——施設の建設は順調に進んだのですか。
山下 紆余曲折がありました。第二次大戦が終わるまで、建設地一帯は旧陸軍の軍馬の放牧地でしたが、戦後は主に旧満州などからの引揚者に払い下げられることになった。そこで開拓のために入植したのが、いわゆる満蒙開拓青少年義勇軍を指導した加藤完治の直系のグループ。彼らの作った入植者組合は、払い下げられた土地は農業以外の用途に使ってはい

けないという農本主義を強く主張していた。たとえそれが社会福祉事業でも認めないということで、解決までに時間がかかってしまった。建設に取りかかれたのは、最初に土地提供の申し出を受けてから3年後の71年。そして72年に開園したのが「白河めぐみ学園」です。

——その後各地に次々と福祉施設を造られて、今や全部で10カ所になりました。

山下 最初の白河めぐみ学園は中程度の障害のある知的障害児のための施設で、定員は30名でした。今だと「小規模施設は望ましい」という考えの時代ですが、当時は80名というのが適正規模。これに重度の人を加えていざれ100名規模にしてほしいと、県から条件を付けられていました。開園後に多くの重度知的障害児に出会いました。しかし、白河めぐみ学園は中程度の障害のある児童のための設備や態勢。何としても重度の子どものための施設が必要だということになった。そこで多くの人たちの支援で開設したのが、2つめの「白河こひつじ学園」でした。その後は、各地域からの要望に応え開設させていただいた施設がほとんどです。

——山下先生をはじめ皆さんの誠実な活

動が評価されて、今度は求められて施設を造っていかれたのですね。

山下 そう言っていたけどと非常に嬉しいです。少し強い言い方をさせてもらえば、キリスト教の信仰をもって福祉の現場で奉仕している私たちの生き方を、皆さんが信頼してくださった結果だと考えています。だから「私たちが必要とする場所」を造ってほしいと、今度は地域の皆さんが私たちに協力を求めてくださったのだと思っています。

牧師としての働きの場は教会だけではない

——いま改めて、教会と福祉施設との関係をどのように捉えておられますか。

山下 社会福祉事業を進めていくうち、「牧師を辞められたのですね」などと言われることがあります。しかし私にとつては教会も福祉施設も、「奉仕する場」「隣と共に生きる場」という意味で同質なのです。これが私の基本的な立場。牧師であるからこそ、社会で弱い立場にいる人と共に生きる道を選んだ。私を見て「牧師を辞めた」と言う人たちにとっては、教会が絶対的な場所なのですね。イエス様が最初に弟子たちにおっしゃ

ったのは「福音を宣べ伝えなさい」ということでした。ただ、どんな所で宣べ伝えるのかは何もおっしゃっていない。聖書に描かれている初期のキリスト者共同体では、礼拝もまもっていた、奉仕の場でもあったし教育もしていた。ところがいつの間にか人々は、キリスト教信仰を宣べ伝えるのは教会という形でないといけないと思ひ込んでいく。

福音に生きるということとは、隣人が必要とする働きの中に、イエス・キリストの生き方をモデルにして生きていくこと。そうして生きる場が教会にあっても社会福祉領域にあってもいいし、またあるべきだろうと思います。キリスト教主義の施設であるかどうかは、福音を中心にした意思決定と行動がなされているかどうかで決まるのだと思っています。

——先生は今年3月、神学研究科から博士の学位を授与されました。論文のテーマは今のお話と関係しているのですか。

山下 論文の題名は「我が国のプロテスタント・キリスト教会とキリスト教社会福祉事業―その共存型宣教共同体形成の歴史的過程と現代的課題に関する一考察―」です。例えば、大森めぐみ教会の活動の中から福祉施設が造られていったと

いう順序を見たとき、教会があつたから社会福祉事業が誕生したと言えば、その通りです。しかし内容的に見れば、そうじゃない。宣教共同体が存在していて、教会も成立し、社会福祉活動を具体化しています。「制度化した教会こそが宣教共同体である」という固定観念にとどまっているのが問題といえるでしょう。明治時代から現在までの教会とキリスト教社会福祉事業との関係を見ると、残念ながら日本では、両者は本質は同じなのに別のものようになっていきます。

これには歴史的な理由があります。初期に來日した宣教師たちは、宣教共同体は教会だけではなく、多様な形態があつていいと理解していた。ただ彼らは、社会福祉や教育関係は自分たちが行うから、教会は日本人を中心に形成してもらいましようという考えでした。教会が日本で成立していくための社会的環境を自分たちは準備しようとした。そういう中から、日本ではプロテスタント教会が誕生していった。ところが、その日本の教会の日本人リーダーたちは、教会が唯一の宣教主体であるという考えだった。明治の頃は弾力的で多様な形の宣教方式が存在していたのに、このような宣教師と

日本人リーダーたちとの機能分担ともいうべきものが、のちのちずっとマイナスの影響を及ぼしていくわけです。

教会と社会福祉事業との連携が新しい可能性を生む

——これから日本の教会はどう変化していくのでしょうか。

山下 日本の教会が今のような考え方を継続していくと、強烈な言い方ですが、組織として崩壊する運命にあると私は危惧しています。今は教会員の高齢化が顕著ですね。日本基督教団の教会では、52パーセント以上が60歳を超えています。すると高齢化社会の中で、教会が単独で存在していく条件が無くなっていくわけです。教会を構成している高齢者は、介護保険などの社会的支援を受けて教会生活を送っていますね。今の教会は他の社会資源を利用することによって、教会としての現在の状態を維持できているのです。

こういう時代だからこそ、これからは教会とキリスト教社会福祉事業とが連携していく必要があるのではないのでしょうか。例えば、高齢のクリスチャンが福祉施設を利用するとしても、キリスト教と

無関係な施設を利用する場合が大半です。であればなぜ、教会の人々と共に暮らせるキリスト教の施設を造らないのか。地方へ行くと無牧の教会や、閉鎖していく付属幼稚園などがたくさんあります。そういう建物があるのなら、なぜそれを障害児のデイサービスの施設として活用しないのか。そうすれば教会も活性化し、より豊かな教会になれるのではないかと。連携し合うことによって新しい可能性が生まれると思います。ただ、私たちは連携を求めているけれども、残念ながらその連携に無関心なのが教会であるというのが私の認識です。

——社会人入学をされてからの、大学院での研究についてお聞かせください。

山下 もう一度大学院に入ったのは、今お話ししたようなライフワークを学際的に整理し直してみたかったからです。娘が神学部を卒業したので今度は自分が、という気持ちもありました。97年から2000年までは休学して、バングラデシュ国立ラジシャヒ大学との共同研究も行いました。バングラデシュ独立後の社会的変化と、障害者対策を含む社会的・経済的政策が、地方の人々にどんな影響を与えたのかという研究です。

論文について言えば、理系の研究者は比較的若い時代に論文が書けますが、文系ではまた事情が違いますね。研究者は別として、とくに神学などでは、現場で長年経験を積まないと論文を書く材料がなかなか蓄積されない。キリスト教教育でも神学部を出て教育者になった方はたくさんおられるのだから、キリスト教教育について論文を書く人がいていいと思います。私は、キリスト教教育とキリスト教社会福祉事業は同じだと思っています。宣教の形態と、本質の現れ方の違いがあるだけです。

——同志社大学に今後望まれることは。

山下 私たちの仕事は厚生労働省の管轄下にあるように、同志社大学も文部科学省との関係、その他社会的制約はあるにしても、キリスト教主義大学である同志社は、宣教に参加しているのです。この本質を忘れないでいただきたい。本質的にイエス・キリストの福音を宣べ伝える教育を行うのが同志社であってほしいと願っています。

——本日はありがとうございました。

（聞き手・當村まり、2007年7月12日「白河めぐみ学園」）